昭和十年土岐先生が発行した呼笛綴方集

『呼笛』綴方教室と嘉瀬の文脈

かされたものだと、教え子の沢田薫氏（嘉瀬農業協同組合参事）は語る。

土岐兼房先生が嘉瀬小学校に着任した昭和九年は凶作の年で、当時の生徒は、学校に弁当を持ってくるのはまれで、ほとんど、シダ飯、シダ餅を常食にしたと、教え子達は語っている。時に国内の社会情勢をふりかえると、昭和六年満州事変がおこり、昭和十二年日華事変へと発展して、昭和十六年十二月八日第二次世界大戦へと突入していった日本が、軍備増強、軍国ファッショの道へと、軍靴の足音が高く聞えてきて、学校にも昭和十年青年学校令が公布され、教育の中にも軍事化教育が強制され、軍事教育の思想が一般化した当時の昭年九年、土岐兼房先生は、嘉瀬小学校の教師として登壇。

今でもとうてい考えられない実践教育の活動を綴り方指導のなかから実行して行ったのが土岐兼房先生で、国民は皆しめら御国の天皇の子であるという、自由の無い圧政下のもとで、教え子達に、自分の意志、意見を自由に発言できる、実生活のなかから表現する生徒の力をのばし、国語教育を基本とした生活綴り方を指導、当時の北津軽郡中の学校教育の中で画期的な綴方（文集）『呼笛』を発行。

津軽北部地方に綴り方教育の足跡を残した土岐先生の校歴は、

北津軽郡嘉瀬村大字嘉瀬に生れる。

大正八年度嘉瀬小学校を卒業

独学で教師免許取得

大正十五年一月九日中里小学校に奉職。昭和四年三月中里小学校から金木小学校に転任、昭和七年八月金木小学校より薄市小学校へ転任、昭和九年三月薄市小学校から嘉瀬小学校に着任、郷土ふるさとの教

壇に、三学年男生徒を担任。昭和十四年二月、軍国ファッショの波が全国に波及、官憲特高警察の重圧にあい、嘉瀬小学校の生徒に綴り方教室の強烈な印象を与え、学校に新風を吹き込んで台湾に去って行った。

昭和九年薄市小学校から赴任してきた土岐兼房先生は、その授業方法も独特で、特に綴方（作文）に力を入れ、『現実をよく見て、自分達の暮しをそのまま書け』と指導されたもので、ガリ切りされた不用となったワラ半紙の裏を利用した用紙をノート代わりに、綴り方を書

嘉瀬小学校に在職すること五年、担当した学年は、昭和九年に三学年生、昭和十年に四学年生、昭和十一年に二学年生、昭和十二年に三学年生、昭和十三年に二学年生の生徒であった。土岐兼房先生の訓導を受けた生徒も今は、それぞれ社会人として独立、それぞれの生活の道を歩んでいる。当時の教え子生徒のなまえを列記すると、

◎　昭和九年三学年、昭和十年四学年

花田柾幸　山中正治　沢田　薫　木立　正　山中正津
斉藤静逸　山中豊光　沢田国平　土岐輝雄　原田康友
斉藤亀七　内海武美　須崎為市　鈴木俊才　神島義信
今　政光　伊藤定次　山中一雄　櫛引米光　斉藤弘徴
野呂梅作　工藤清治　原田安左衛門　山中満信
吉崎信雄　須崎安政　山中朝太郎　鳴海俊男
吉崎年美　工藤忠光　小松　由　飯塚秀雄　今　勝美
須崎松雄　神島岩夫　吉崎光治　成田哲雄　鈴木敏栄
沢田豊太郎

◎　昭和十一年二学年、昭和十二年三学年

三上民雄　吉崎春雄　神島徳衛　原田　勇　山中利幸
成田千代仁　伊藤清光　今昭三郎　山中良一
斉藤正美　花田粕次郎　原田藤松
山中兼継　吉崎兼雄　今　盛衛　山中文吉　伊藤満男
松川秀光　斉藤礼吉　今　熊市　秋元定美　鎌田富春
斉藤亀男　野戸谷孫一　沢田則昭　小山内繁美
鎌田　武　原田兵司　工藤信男　松川竹新　今武美
秋元男茶　木立忠政　飯塚秀光　今木八郎　山中林一
鳴海善一　黒川富志美　伊藤重一郎

◎　昭和十三年二学年

原田哲雄　山中義美　岩村久美　内海武志　木下常雄
棟方平内　花田甚市　成田清一　沢田　孝　山中　治
阿部清二　今喜代友　吉崎忠直　成田　収　外崎京哉
原田与四松　原田勘之助　木下文雄　鳴海憲一
蛸島春義　鎌田清一郎　坂本利道　野上正則
山中孫一　櫛引繁松　須崎正志　嶋谷鶴義　沢田一郎
成田勝義　山中岩見　須崎為光　神島徳治　内海兼市
工藤　論　櫛引三郎　神島国春　斉藤義雄　であった。

昭和九年から昭和十三年までの五年間に、嘉瀬小学校生徒に植え付けて、昭和十四年二月嘉瀬の地、ふるさとの地から去って行った土岐兼房先生の綴り方指導になる火は、先生が去ったあと消えてしまったのであろうか。

いや、先生が去っても、その生徒の心の中に植え付けた若い芽は、教え子達によって開花されていった。

そして、そのともしびの火は、昭和十六年日本が第二次世界大戦大東亜戦にのめり込んで行った時、小山内嘉一郎氏等が主宰する俳句同人誌『鳴子』が発刊され、過酷な戦況下で、心の支えとして発行

し続けられ、悪夢の第二次世界大戦も、日本の敗戦で戦争も終幕をつげ、昭和三十年の秋、敗戦の虚脱伏態のなかから、嘉瀬の若いグループ山中正津氏（現金木町産業課長）が主幹する。沢田薫氏、原田僚氏山中利幸氏等同人になる総合文芸誌、『灯』同人誌会員三十人の文化の火が点火された。その源流は、昭和九年と十年に土岐兼房先生が当時担任生徒に綴り方教室で指導した芽が、根底にあったからにほかならない。

当時先生の指導を受けた生徒が、さらに若い灯の火を結集して、昭和二十八年に嘉瀬新聞、昭和二十九年に報知嘉瀬へと、当時の社会情勢を若い青年達の目でとらえて発行。さらに昭和二十六年総合文芸同人誌『灯』から、俳句壇が別れて、句集同人誌『砧』が生れ、現在も嘉瀬の俳人達によって発行し続けられて、句会を主宰する沢田薫氏は金木中央公民館が企画する俳句教室の講師として、次代に渡け継ぐべく文芸の灯を育てるために活働している。

土岐兼房先生が出した綴り方『呼笛』は、先生が嘉瀬を去るとともに、戦争の拡大とともに、受け継ぐべくもなく消えていったが、戦後の傷跡も癒いて復興、平和をとりもどし、安定してきたころの昭和三十七年、今清一氏が嘉瀬小学校長として赴任してきた。この校長昭和十七年から十九年九月まで嘉瀬国民学校教師として、嘉瀬の教壇に立ったことから、土岐兼房先生が文集『呼笛』を出したことが頭にあったので、校長に着任するとともに、土岐先生の意志を継続するためにも学校文集発行の企画が構成されていった。

昭和三十九年当時の教師、高橋恭子先生、小田桐安昭先生、葛西寛先生、山形英二先生が主力となって編集、各先生の手によって生徒の作文がガリ切り製本されて、嘉瀬小学校文集として、表題を『呼笛』と付け、再び『呼笛』の固称が陽の目をみた。この文集、現在も年一回学校文集として発行し続けられて、昭和五十六年で第二五号に育っている。

また、昭和も三十七年から、農村出稼ぎ者の中から行方不明者が出るようになり、留守家庭のこども教育が学校とＰＴＡ会でも問題にとりあげられるようになった。嘉瀬小学校も論外でなく、嘉瀬小学校ＰＴＡ広報常任委員会の事業の一還として、昭和三十九年三月、出稼ぎ先の父兄とこどもを結ぶ文集として『かけ橋』を発行、それぞれの出稼ぎ先の事業所で働らいている父兄のもとに送り届けられた。

この出稼ぎ文集『かけ橋』、ＰＴＡ事業の一つとして取りあげられたことに意義があり、青森県内の出稼ぎ文集の先便をつけたものであった。この文集も今年で第四六号を数えた。

昭和五十二年二月十日に発刊した嘉瀬小学校百年誌の製作も、企画から編集までとりまとめしたのは、土岐兼房先生が綴り方を嘉瀬小学校に残して行った指導の芽が育って、先生の教え子、卒業生の手によって発刊でき得たことは、先生が、その土壌を開拓してくれたからにほかならない。

結び

昭和九年から昭和十三年まで、土岐兼房先生が嘉瀬小学校の教壇に立って指導した綴り方『呼笛』の芽は、貴重な財産となって、当時の教え子達によって今も受け継がれ花開き、俳誌『砧』の中に生き、嘉瀬小学校文集『呼笛』の中に生き、親と子を結ぶ出稼文集『かけ橋』の中に生き続け、『嘉瀬ふるさとを探る会』の会員のなかにも、その芽は育って生きづいている。土岐兼房先生は、金にかえられない大きな宝と、大きな遺産を私達に残して、私達から、ふるさとから去って行ったのだった。

嘉瀬小学校文集　よび笛

出稼ぎ文集　かけ橋

嘉瀬の皆様に依頼

昭和九年から昭和十三年の間に、土岐先生の手によって発行された綴り方集『呼笛』を、土岐先生の教え子の方で保存している方があったら、『嘉瀬ふるさとを探る会』にお借し願います。

会誌『かたりべ』の特集として第三集に、日本が悪夢の戦争に突入して行った当時の農村地帯児童の貴重な生活記録であるとともに、当時の嘉瀬の記録でもあるから、これを後年に残して行きたい企画をしているのでお願い致します。

（編集部）

歴史ポット

金木館守寝返る

天正十五年六月新城白旗城番阿部孫三郎外ケ浜より山越え加勢城を攻め、金木舘主対馬金右ェ門嘉瀬西・東舘を攻め落城す、八重佐助討死す。ときに金木舘主金右ェ門はもと浪岡北畠幕下の部将とされる。金右ェ門が金木舘守になった以前は、津軽古城古舘覚によると『金木舘金木弾正忠』であるとされ、浪岡史談よれば『金木弾正姦臣鼻和田宮少輔と口論、君名により切腹』とあるところをみると、この後に金木舘守に配されたとみられる。

また『方々由緒記』に『対馬金右ェ門為信公御世、下の切の内金木に而御沮仕立願之通仰付候・其度飯詰南部領而、往来難儀成・其上喜良市に佐助ヲトナ申狄（アイヌ）罷有・追付候ては追払候付・金木迄往来致し・天正十六御案内申上様被仰出・則金右ェ門御先立仕・飯詰西口尻ナシ申所より御馬入・其後開発知行三十石被下置候』と為信幕下になっている。

なお東日流外三郡誌では『天正十二年、大浦の部将乳井美作はかりごとをもって金木舘守対馬金右ェ門を惑誘、大浦方に寝返らせ、十三湊舘を攻め落し、行来川（岩木川）の往来を容易にした』とあり、天正十五年十月八重佐助を討果した対馬金右ェ門・阿部孫三郎と大浦軍は、尻無舘・金神舘・悪戸舘・金山舘を落し、飯詰高楯城を孤立無縁とした。

佐野洪忘備録

昭和五十一年十二月一日発行の金木郷土史の編集委員の一人であった佐野洪氏が郷土史編集の資料として、実施調査したメモや、郷土の古文書等を移写した記録帳を抜き書きしたものです。氏は今も健在で私達ふるさとを探る会の顧問で、郷土を探る方と、郷土嘉瀬にとってなくてはならない郷土史研究家です。掲載した各資料について、これからの皆さんの、郷土を探るための参考の一頁になれば幸いです。

（編集部）

◎　人丸神石（柿本人麻呂）

嘉瀬に山中家の祖先歌読みの者ありたり、北大区小区十三滇のかたわらに乱石があり、そのなかに人丸の神石があると聞く。その山中家の祖先に、ある夜夢のなかに一人の翁枕元にあらわれ来たりて告げて曰く、『吾れ、潮辺に廃れたり、速に来りて、求め得と。』

今泉村に知人あり、彼の力を借りて、四・五人の歌読み同志と語らい、慶応乙丑六月十八日十三湖の乱石を探したるところ、長さ三尺、圏囲七尺二寸背に人丸のを鐫たりし石を得たり、二十五人の人夫を雇って嘉瀬に持帰ったという。

清久溜池（通弥嘉瀬溜池）の東方の地（小山内長八の土地通弥人丸崎）の松林草原に前記の年に、五間に三間の堂宇を建立、奥の院に人丸の神石と木像物が安置されてあったという。

山中家の祖先竜之助氏は文筆家で歌人でもあり、号を水魚庵と称す。明治十三年春、人丸神石を祭る堂内で、当主山中龍助氏の四十二の祝賀を兼ねて、県下の詩歌人　長利仲聴、大導寺繁禎、斉藤規文、小山内清俊、土門実俊、宮田充、葛巻行庸、菊地広英、小栗山長利龍雄岩木山下沢保躬等の有志が集り、四十二を祝して詩歌を詠みたり。

大導寺繁禎　四十餘り、二葉の松に千代かけて、栄行くへを色そみける。

斉藤規文　人の世は、ひとなみくに　我国の緒もゆらみ春かな。

土門実俊　萬代というは誠か、いつはりのきみそ　みたへる亀の行末。

葛巻行庸　老の坂、誠そさかり、今年こそまま、和がへるはしなりけり。

この四十二に詠まれたる、詩歌短冊は今も板柳に在住の山中美津雄氏が保存しへり。

◎　円　空　仏

青森県の円空仏の所在地は、南郡八幡崎に一軀あり、龍飛の巌上にもありたる由なるも、今は失くなれり。八幡崎の作成仏はやや等身大のものなり。

◎　狐　崎　村

狐崎村は、本村嘉瀬より南一町にあり、家数五軒、南長富村へ五町東中柏木村まで十六町、西は田圃に接っする。

◎　津軽の三不動

①黒石市（旧大郷村）長谷沢寺。②黒石市（旧山形村）中野神社

③碇ケ関村古懸山国上寺を津軽三不動という。なお津軽鎮護として、

岩木山百沢寺。大円寺。久渡寺。蓮萃寺（賀田愛宕山）古懸国上寺を津軽五山といった。

◎　獅子舞の由来

昭和五十二年十月二日木村峰五郎氏所蔵の獅子舞由来語りによると、我が国には古くからあったと云う固有説、人皇八十代高倉天皇の承安二年（西暦一八三二年）六月十四日百錬抄によると、祇園御多会の時六條上皇の御覧に入れ、そのときの獅子は七肩であった。

津軽の獅子の起源は、弘前藩の野元道玄が同市松森町の猫右エ門の処で古い巻物を見て之を訂正。信政公に御覧に入れたのが初りといわれ、今に伝わっているのは藤田半左エ門が訂正したもの。

嘉永年間、悪戸村の獅子が赤石村に行って踊ったところ、赤石組の手代役保村治右エ門に呫められ、悪戸村の老人が、松森町の獅子が八幡宮の祭札があったとき、欠員があれば、吾が村から補欠に出るので我々はその練習をしているのだと云ったら許されたという。

また仝年間、岩間滴と申す者が、取上村の小枝三十郎方で獅子の巻物をみた。この巻物には応永十二年秋七月足利利直とあったから、それが猫右エ門の処に伝ったものだろう。

獅子舞は、悪魔払い、祝福、豊年祭、新築祝、結婚式等で舞われ、浅井村では二百六十年程前から伝っていると云うから、そうすれば元録十二年ころからとなる。

◎　古　民　謡

村は平和で、家庭は円満。日が出ては働き、ぼっしては憩う。居間不安もなければ不満もない。祖先は働いては唄い、休んでは唄い、疲労を唄に流して、働らいた唄は、生活感謝の声でもあった。

今から三百年程前の寛文の昔、飯詰村の新岡七左エ門が、出入りの者を集めて、一杯機嫌で思い〳〵に唄った文句が新岡累代日記に載っている。

〈夫婦二人で、田の草取れば、広い一町田も狭くなる。

◎　工藤家の墓石調

①明和四年正月十八日（西暦一七六四年）　②天明三年十二月十五日（西暦一七八一年）　③寛政九年四月十三日良寛寿山信士（西暦一七八九年）　④文化十四年十二月十五日（西暦一八〇四年）　⑤文政二年四月一日（西暦一八一九年）　⑥文政九年五月三十一日（西暦一八二六年）　⑦文政十二年十月十六日（西暦一八二九年）　⑧嘉永元年六月十八日如円入清居士（西暦（一八四八年）　⑨嘉永二年四月十日（西暦一八四九年）　⑩嘉永三年一月三十日（西暦一八五〇年）　⑪慶応三年十一月九日（西暦一八六七年）　⑫明治三年九月二日（西暦一八七〇年）。このほか明治時代のもの三個ある。

◎　覚書メモ

※妙光庵は明暦元年の草創なりと云われる。

※享保十六年保食神社（馬頭観音）勧請されたと云う。

※享保十三年洪水のため毘砂門、長富、加清、金木大被害を蒙り、大半の水田稲作皆無作となったと云う。

※元禄二年に初めて嘉瀬村に質屋が開業した。

※興国三年の安倍貞季の作図に浪岡、神山、飯詰、中柏木、加清、小田川城、大倉岳ほか大小河川並びに乙別地、今飯詰、鮎川、外ケ浜が克明に記入されて居る。

※元亀二年に中柏木磯崎神社が勧請せられ、創立不明なるも嘉瀬八幡

宮元亀二年再建と伝えられる。

◎　五　輪　塔

五輪塔の古いのは、宝珠が蓮花の蕾に似て、三段の屋根に反りが無く、時代を降るに従って屋根の反りを増し勾配が急になる。

◎　板　　碑

丸い自然石の厚いものを用い、表面のみを平滑にしたるものもあり鎌倉時代貞永・寛元のころより始まり、室町時代特に盛んに建立。

◎　小山内館（飯詰館）

飯詰を出て中柏木に向いて暫く歩くと、西方に小さな森が見え、一寸大きな松が生えてる所から入ると、今は葡萄を植えている森に至る。ここを小山内館と云って、南方は三つの出崎になっていて、真中に昔は御宮があって弁天様で女の神様と伝えられているが跡方もない。前の葡萄畑の前を見ると二重の堀があって、昔時の城跡は確実で、土器の破片等が出土するところを見れば、飯詰の高館城と連絡した城跡であることは確実である。小生城跡内の道路から女蔭の石を拾得して保存して居る。

◎　嘉瀬八幡宮

嘉瀬八幡宮の境内並に附近の畑も、昔の城跡で、堀も次第に失くなるも、未だ二ケ所に亘り残っている。小生当地に在宅した時に、堀より矢の根を拾得した事あり、飯詰の城と関係があるか如何か不明なるも、或は喜良市の八重佐助にも関係あるかと思われる。なお東方の畑も是れに関連した城跡と見るも差支えないと思われる。

◎　御城山（加勢城）

御城山は嘉瀬と喜良市との間の橋より、東方に一町ばかり東行すると可成の大なる城跡あり、三段の土塁ありて、頂上は至って狭いが、是も八重佐助時代の城跡なることは明らかなり。

◎　墳　館　跡

喜良市村の東方の油川に出る街道の入口の上に墳館あり、中は二町歩位いの広い畑になっているが、たぶん八重佐助の根拠地なりと思われる。ここの墳館の奥に入ると、東方に蝦夷館あり、ここには煙突穴の残っている洞穴と、ほかに小と大の館穴あり、墳館に附属したる城跡なることは明らかなり。

◎　小田川苗圃

小田川白岩の左手上は小田川苗圃になっているが、昔は飯詰より味噌ケ沢を通り、みづの沢、猫右エ門沢、惣次郎沢、滝の沢、おつぼ沢白岩沢を通りて小田川に出て、苗圃に上り、東側を通りて、一町ばかり北に行くと、沢は二股になり流れて、右の沢の二・三間北の処に横穴二個あり、土にて埋り居るも、穴の屋根は二間ばかりの石の屋根あり、当時八重佐助の時ならん、アイヌの穏れ場所に用いたるものと推察され、苗圃より小生石斧の破片を拾いたる事あり、従って苗圃も昔時は住居に使用したるものと思惟す。

◎　嘉瀬古墳

嘉瀬村に古墳ありと云えば、誰でも驚く事だろうが、嘉瀬山スキー場の北に、一ツ盛、二ツ盛と云っている所がそれである。余程前の事だが、某博士が古墳だと云ってたが、一ツ盛は既にこわされて、今三上石材店の敷地となっているが、ブルトーザーを使用した沢田繁男氏の次男が、当時この場所で縄文時代の瓶の破片が多数出土し、小生拾得して保存しているが、この場所の奥にも、それよりも大きな三角形

の土盛があり、スキー場附近に住居した縄文時代の民族の首長の墓なることは確実なり。なおスキー場一帯に土器並に堅穴も見られるが、土器は一寸堀ると沢山出てくるが、山下の畑にも散乱して居る。

◎　数学著書

寛政年間のこと、嘉瀬に塩谷なる人が居て、三十六才の時、数学の書を著したりと伝えられ居るも、その後の時績は明らかならず。

◎　忌み嫌うこと

『シミツ』は門徒宗を除くほかは、何れの宗旨にもあるが、禅宗は最っとも矢釜しかった。『シミツ』は一つの家憲で、誠に窮屈な家法である。要するに『シミツ』そのものは、子孫カマドの締りが厳重ならんことを要求したものであろう。その例として

(イ)＝二十九日に正月の町買するな。元亘に起されたり叱られたりするな。正月三ケ日は催促するな。

(ロ)＝正月に障子張替するな、小正月生焼の餅食べるな。贈答品は偶数にするな。

(ハ)＝日返り餅は焼いて食べるな。赤飯に湯をかけて食べるな。人に声かげ水を呑むな。

(ニ)＝水に湯を入れて使うな。一杯飯食べるな。清物は一きれ又は三きれ付けるな。

(ホ)＝七日目に家に帰るな。申の日に断物するな。葬式には新らしい着物履物使うな。

(ヘ)葬式の送人の物を持って帰るな。悔や会葬人は見送るな。物干竿の下をくぐるな。

(ト)＝夜干竿をかけて置くな。窓から物を出入するな。屏風の上から物をやり取りするな。

(チ)＝箒を逆に立てるな。御客が立っこ史直ぐ掃くな。夜る瓜を切るな。

(リ)＝五月蚊帳つるな。家の中で口笛吹くな。

◎　山中龍之助

前町の山中龍之助は習号を雲洞と写し能書の誉あり、飯詰法林寺の世話役をなし居る其の時代に、秋田の無等と号する書家の弟子と、尚弘前の盛山内揮山門弟であったとせ云われている。

◎　地蔵尊考

近頃の都市には殆んど見受けられないように、町の入口にも出口にも、地蔵尊の堂も見受けられず。片田舎の出口に夫々に御堂を建てた中に、顔を化粧して、青や赤の布地で作られた着物の上に、前掛けを懸けた姿の顔を二個三個と、多いところでは四個五個も建って居るのが見受けられる。

地蔵尊を地方では、お地蔵様、または地蔵様と云われて親しまれてきた。日本人の道標（道案内）の神。道路守護の神として古来から信仰されてきた。道祖の神即ち御障神の思想と合併して、初めは旅行脚平安の守護として信仰の人々が、あとに町内の安全、村中平安の守り神と云う考えにまで発展したるものだろうと思われる。

◎　在宅武士の家

津軽藩の家臣であって在宅（新田開発のため在野田舎に引移った人）した家は、仲々由緒のある家柄で、嘉瀬には三軒あり、今でも源治ド（須崎家の先祖名）。マインド（櫛引の先祖名）。ゼナイド（喜右エ門の名）で、明治五年以降に武士から下ったのは、今サマ、野呂サマ

佐野サマと云われ、今一軒広津サマと云う人が居たそうだが、今は不詳である。

◎　盆　踊　り

盆の供養は古来より旧盆の七月七日から七月二十日が定まりであるが、近来出稼ぎ、帰省、親戚訪問が八月の暑中休暇を利用するのが普通となって来たので、寺院側でも、今では一月遅れの盆供養に従うことになった。

盆参りは、先祖身内の家内の死去せる人を弔い、将来の安全祈願を仏様にする事にある。

盆参りの帰路、前町に出てくるので、此処に盆踊りは初まるのである。帰路の子供等が輪を作って音頭取りの声に合せて踊るのが初まりで、遅くなると大人が之に加わり、夜中になると道路一杯約百米位いに広がる時もあり、遅くなる程、他部落の若者達も加わり、愈賑かになり、何時終るかわからぬ程にて、夜明けまで続くのは普通であったが近年は昔様でなく、中柏木、小栗崎、喜良市、金木等の飛入りもなく衰体期に入っている。

踊りの順序は、ドダレバチ踊り、エッチ踊（領詰の伊勢子踊りに似ている）甚句踊り、座敷踊り、奴踊りで終ったようだった。

◎　昔の農家の休養日

㈠＝正月（元日より七日まで、十六日より二十日まで）
㈡＝二月朔日（春彼岸の内三日）
㈢＝三月は三日間（田打仕廻り一日）　㈣＝五月五日（田植仕廻二日）
㈤＝九・十月（稲村納め二日）

◎　嘉瀬の雨乞祭りについて

嘉瀬で雨乞祭りが行われたのは、昭和二十四・五年頃だと思われる。此年雨が幾日降らず、水不足で、農作物を早魃から救う為に、役場から補助金を貰って、神様に雨を降らせて貰うための行事でした。

小田川上流の藤の滝のそばにある御宮の境内に、御神酒を奉納して関係者一同が集って、僧侶二人がお経を上げている内に、藁で作った赤子とエンツコに縄をつけて、滝の上からしづかにおろし、村民が声高に泣き初めて、それが滝の音と唱和して、忽ち霊感が表われると云う行事で、翌年も同様に取り行われた。

◎　津軽の語源

『津軽』と云う名はアイヌ語で云う学者は、日の出る国の人という意味の『チュプカグル』に由来した古名だと云うが、アイヌ通の人の言によれば、そうでなく、同じアイヌ語でも、藤崎を中心とした意の言葉であって、『ツガリ』から来た語だと云う。

『ツガリ』とは、何河流が落合う附近の平原と云う意味で、古書には、津軽を『津刈』とも書き、また『津合流』とも書いている。

◎　十三の七不思儀

※田が無くても米が沢山。※山が無くても木が沢山。※春になってもカッチョを取らぬ。※夏になっても蚊帳不要。※雨が降っても草履バキ　※カラ針で魚を釣る。※親父居なくても子が出来る。

◎　嘉瀬村内の樹木

※古町平川光政裏、欅＝高サ五間、周囲三五〇㎝、シナ＝高サ十間、周囲四五〇㎝、※鳴海勲裏　楓＝高さ一間半、周囲三〇〇㎝　シナ＝高サ十二尺、周囲一三〇㎝、高サ八尺、周囲一三〇㎝、李＝高サ二間、

周囲一二〇㎝、欅＝高サ二間、周囲二〇〇㎝　※小山内兼蔵裏　欅＝高サ五間、周囲二九〇㎝、雷樹＝高サ八間、周囲四〇〇㎝、シナノ木＝高サ五間、周囲三二〇㎝、※吉崎民弥裏　楓＝高さ三〇〇㎝、太サ二〇〇㎝、※佐野宗裏　アカシヤ＝高サ十間、太サ二五〇㎝　シナノ木＝高サ十間、太サ二〇〇㎝

◎　墓　石

妙光庵の古い墓石を見るに、嘉永四・七・元年のもの、天保四・六・年のものあり、最っとも古きもの寛政戌二年二月七日秋元幸一郎の墓石なり。

明誓庵の墓石は寛政三年、文政元年・四年。文政四年。嘉永文化等もあり、西暦一三二六年嘉暦のものもあり、此の辺にては最っとも古きものと思われる。

中柏木の墓石にて古きものは、嘉永五子七月九日、天保八酉七月二日、文政子十月の玉井林右エ門（江戸相撲なりしと云う）が古い。小栗崎にては寛政五年伊藤家のものが古い。

◎　嘉瀬在郷軍人分会

嘉瀬在郷軍人分会の創立は大正六年よりにして、初代会長は沢田立雄氏なり、其後山口長助氏分会長となり、昭和七年八月二日副分会長に山中熊四郎氏がなり、副増田昇氏並に松川新八となり会員総数は二五〇名なりき。昭和二十年八月十五日終戦となり、仝年八月二十八日慰霊祭を行い、仝年九月十三日分会を解散する。

◎　古　街　道

中柏木が一番早く展けた村であると云われて居るが、かえって嘉瀬の古町と名付けられている点から考えると、元長富から清子溜池の下を通り、狐崎より古町に下り、真っ直ぐに小田川を渡り、八幡宮の西通りの街道にて金木または喜良市に往復した状況は現在にても確め得る状況になっている。

古町の升甚の畑より人骨並に金・鏡・櫛等が出土す。鏡は小生保存している。又後町の黒川家並に平川家の真後に、喜良市に行来した馬の往復に用いた道路も残って居る所を見ると、古い時代に隠里として生活したようにも思われる。なお鋳守八幡宮は元亀二年に再建と云う記録があるところから、相当以前から出来た村であろう。

◎　三十三観音像

嘉瀬観音山の清水湧くところより北側を登る。登り口に屋根ある小屋の中に二・三尺位いの地蔵尊三本あり、奉納者は嘉瀬十名喜良市二名で昭和九年三月三十五日奉納とあり、頂上迄左右に道路を登るに従って三十三観音像あり。

◎　十三安東藤原氏の支配したころ建てた寺

岩木山（西方寺・永平寺・白沢寺）　十三湊（檀林寺・阿叱寺）　阿闍羅山（大日坊・不動院・観音院）　梵珠山（釈迦堂）　平賀（極楽寺・毘沙門堂・福王寺・神宮寺）　外ケ浜（妙見堂・北斗寺）　糠部（石文寺）　恐山（地蔵堂）　深浦（観音堂）は東日流安東氏が建てた寺院である。

◎　昔の履物と着る物

※草履の項＝足タカ・ゴンベ・ツマゴ・ノッペ・クヂ・スベ・二ツコ・三ツマ・デネゲツ・
※着る物＝ケラ・ワラゲラ・シナゲラ・皮ゲラ・グデゲラ・グテゲラ・ヨメゲラ・クゴゲラ・セナカアテ・ネゴ。

◎ 嘉瀬スロープ

嘉瀬スキー場は、津軽鉄道開通後津軽の『嘉瀬スロープ』としてその名が知られるに至った。嘉瀬スキー場の思い出として嘉瀬体協の木村米吉氏は語る。

嘉瀬スロープがようやく認められるようになったのは昭和五年津軽鉄道が布設された翌年の昭和六年である。

歴史としては本当に新らしいが、津軽鉄道の故青山支配人と泉運輸課長、嘉瀬スキー倶楽部鳴海会長（民之助）等の献身的な努力により、素晴しい勢いで発展し、昭和六月一月には津軽鉄道主催のもとに、西北スキー大会を行い、十キロ競争一種目であったが、参加人員三十余名、選手の大部分は、パラフィンを用いたので、スリップし、優勝カップを得たのは五農高選手前田文雄君であった。走法の巧妙なこと、田舎の人々は随分感歎して見たものである。

昭和七年二月五所川原・金木・嘉瀬の三巴戦は、津鉄後援で行われたが、之は郡内スキー対抗の最初だと思う。十キロでは五所川原の蒔苗、嘉瀬の木村両君がゴール前迄の大接戦を演じたこともあった。

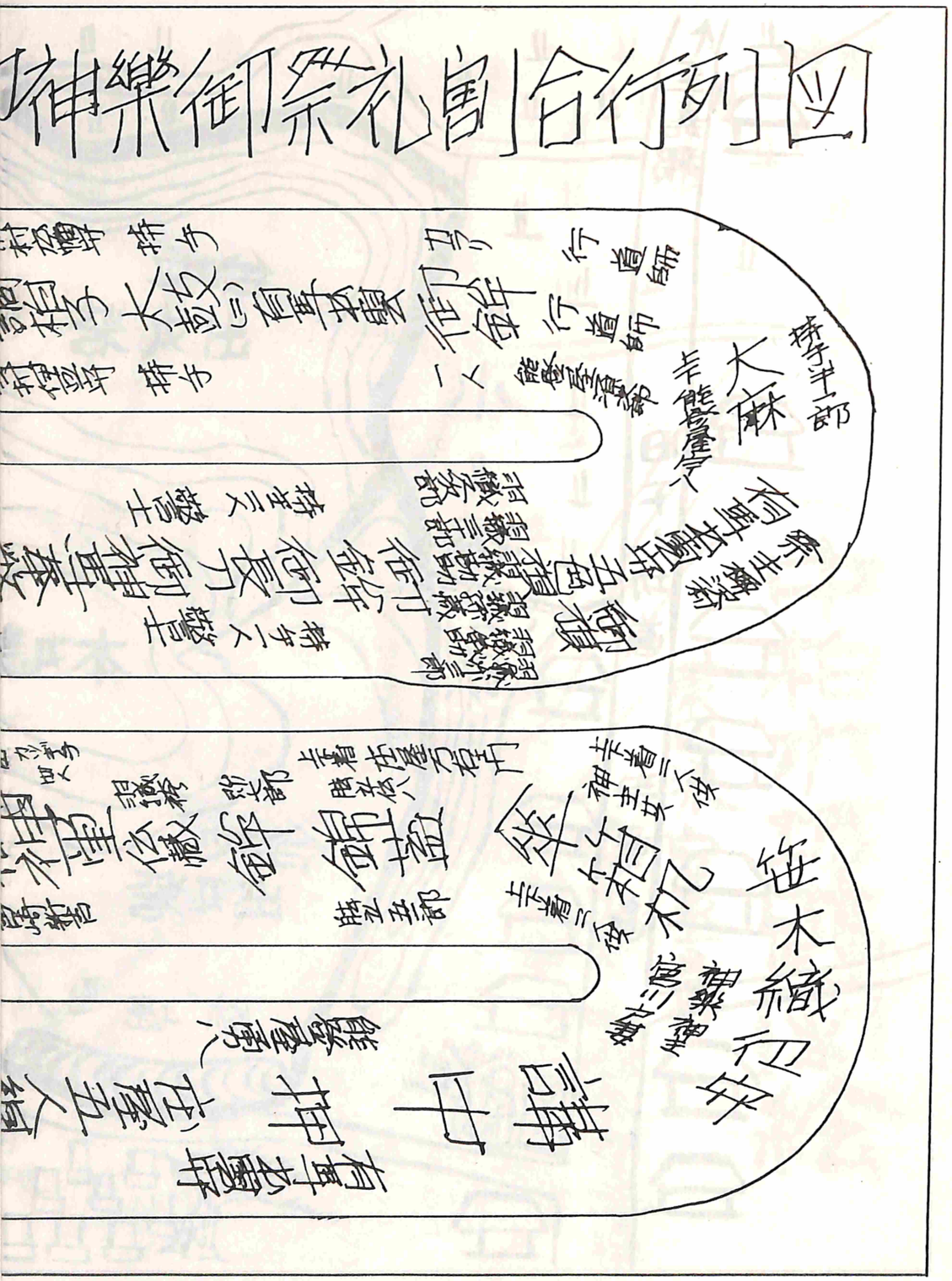
ジャンプ台がやっと出来上ったばかりで、ジャンプ台の使い初めであったが、之も矢張り五所川原町其田と嘉瀬村の木村両君の大接戦、最後は『リレー』で決っする間際に、コースを誤った事から問題になり、其の後三ツ巴戦が有耶無耶に屠り去られた事は残念でたまらない。

昭和八年二月県下スキー大会がスキー連盟主催で行われるとの報伝はるや、村民一同結束して、資金を出し、津鉄また莫大な援助をして呉え、倶楽部全員で徹夜までして此準備に当り、大会を待ったのである。

期日迫るや、青師協中の合宿あり、木中また必死の猛練習、現青年師範教授丹内氏は一日五十回飛躍をモットウに物凄い練習であった。斯くしている間に各倶楽部、各小学校が乗り込み、すっかり大会気分になった。

県の方からは、長官初め矢野学務部長、佐々木禎学宮等の御歴々がスロープに輝しくシュプールを刻んで下された。

倶楽部では、小・青・壮年よく揃っている。野辺地断然の優勝であった。女子の方は、新進の五商女合宿で頑張り通し、中学校では、男子五農が地元丈であって、これ又断然の優勝であった。女子の方は五高女が野辺地実科高女と大接戦の後、覇を争い、遂に野実高女にしてやられた。

小学校は、尋常科高等科共に大鰐強く、他の追従を許さなかった等幾多の感激を残し、盛会裡に幕を閉じようとした時、突如襲った猛吹雪の為、汽車が運転中止となり、寒気は益々加わる、各宿舎に引上げて、吹雪の止むのを待ち、スキーヤー達は待てど止む様子が更にないので、橇で五所川原へ送られる者、又待ち兼ねて、線路伝に勇敢にも飛び出して行くスキーヤー。此の人々の中には凍傷にかゝり、空腹に堪え兼ねて気の毒な目に遭った人もあった。

昭和十年県下ジャンプ大会を、嘉瀬スキー倶楽部主催、津軽鉄道会社後援で行った処、七十三名の参加人員があり、小雨の中の悪コンディションと戦いながら、物凄い『フォーアラーゲ』を見せて飛躍して呉れた。此の飛躍台の飛巨離は二十二・三米位より出ないので、昭和二十二年改築にかかり、昭和二十三年十一月二十日やっと完成、三十米は飛躍出来るようになった。